

令和3年度三重大学教育学部附属幼稚園 学校関係者評価書

	取り組み	評価と達成状況	今後の課題と改善	学校関係者評価
保育	<p>幼児理解に努め、一人一人の幼児の発達を支える幼稚園づくりに努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育について全職員あるいは学年で話し合い、月案や行事の検討や幼児一人一人の育ちや支援についての情報交換を行う。 ・幼稚園経営に全教職員が積極的に参加し新しい事にも意欲的に取り組む。 ・効果的で適切な学校運営のため、園務や委員会の見直しを実施するとともに事務業務や会議運営について更なる効率化を図る。 ・「教師としてレベルアップするための基本姿勢」「幼児に接する際の基本姿勢」を意識して保育する。 ・教育活動についての反省を今後の保育につなげる。 ・教育ビジョン めざす姿の実現に向けて「ものとの対話が深まる保育環境の構成」「四季、自然事象への興味関心」「異年齢の友だちとの交流」「幼児の発達の理解、発達を意識した援助」「保育記録の工夫」「幼小連携、一貫教育の推進」に積極的に取り組む。（下位項目については令和3年度教育ビジョンを参照） 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度もコロナが収束せず、年度当初に立てた保育計画の変更が度々あったり、休園、分散登園等イレギュラーな対応をしなければならない事態が続いた。その都度職員会議等で意見を交わし、情報を共有しながら進めてきた。保護者の理解と協力もあり、度重なる変更にも拘わらず大きな混乱なく園生活を進めることができた。 ・コロナ対応については、担任の教諭はもとより職員全員で保育形態、消毒等に徹底して取り組み、継続してきた。今後も対応を継続していく。 ・園からの連絡はほぼきずなネットで行うようになった。このことにより事務の負担は減少した。また欠席連絡についてもグーグルフォームで行うようになったことで負担を軽減することができている。 ・週案を基に話し合い、担任間での保育の共有ができた。年長の担任を中心に異年齢交流の方法を探り、実施できたことは子どもにとっても良かった。 ・職員同士の話し合いの中で学ぶことが多くあった。 ・週案の形式を変えたことで、PDCAサイクルによる保育がより明確になり、保育の質の向上を図ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後もコロナ対応はある程度していかなければならないと考えられる。これまで行ってきたことを継続していくとともに子どもたちにとって豊かな園生活となるように新たなことに取り組んでいく。 ・年度末にタブレットが導入されたこともあり、ICT化がますます進んでいくことは必至である。朝の健康観察もタブレットを使ってできるようにするとともにタブレットの有効活用について工夫をする。また保育の中においても必要に応じて活用を工夫する。 ・教員の資質向上について、今後も意識して取り組んでいく。教員とコミュニケーションを密にとりながら丁寧に伝えていくようにする。特に保育や行事の振り返り、学期ごとの振り返りや評価、次に向けての取組についてそれぞれの教員が意識できるような体制を作っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続きのコロナ禍において、行事や活動を工夫したり、新たな方法を見出したりしながら行ってきたことは評価できる。附属幼稚園の保育の質の保障はしっかりとできていると感じる。 ・感染症対策で保育が難しい中であっても子ども中心の保育をしっかりと行っていることが評価できる。 ・今後も附属幼稚園の大切にしている子ども中心の保育を守ってほしい。
	<p>教師間の連携を深め、力を合わせて教育目標の達成に取組み、それぞれの個性を発揮した豊かな園環境づくりに努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同僚性・協働性を高める。 ・教育ビジョン目指す姿の実現に向けて「教師の資質向上」に積極的に取り組む（下位項目については令和2年度教育ビジョンを参照） 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、動画を作る中で、いろいろな角度から子どもを見取り、教師の援助や環境を考えることができた。また、何を伝えたいのか、どう伝えるのかを議論でき、多くの学びがあった。小学校や地域、保護者に対して伝える際にも、活用していけたらと思う。 ・それぞれの教員の得意なところ取り入れたり、交流しながら進めていける場所もあった。教員相互で刺激を受け合い、真似したり、自分なりにやってみたりする姿勢が生まれたのも良かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員一人にいろいろな分掌が集まらないように、職務分掌についての配慮が必要である。併せて教員の資質向上に取り組む、教員一人にかかる負担軽減に努める。教員一人一人の良さや持ち味を活かしつつ、なおかつ資質の向上を目指していくようにする。 ・研修のICT化については、より工夫を重ねて参加しやすい研究会を開催していく。これまで参加人数を限定してきたがより多くの人に参加してもらえようなども工夫していく。対面での研究会（公開保育）も必要不可欠であり、ハイブリッド型の研究会（研修）の方法を工夫していく。 ・今年度委託研究事業を通して学んだことを実践の場で活かしていくようにする。委託研究での成果物を活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・働き方改革が叫ばれているが、職員の多忙は変わらず業務内容もなかなか減ることがない。特定の職員に業務が偏りすぎないように分掌を見直し、また業務の内容を精査し、少しでも業務改善に努めることが肝要である。 ・職員のモチベーションが保たれ、向上するためのひとつとして自己評価のシートの改善を行ってほしい。
研究	<p>保育研究を活発に行い、その成果を実践に生かし、さらに地域に公開する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマ「遊び込む姿を目指して一ものとの対話が深まる保育環境を考える」の2年次である。 ・教育課程に基づいた保育の展開、検証と改善に取り組む。 ・研究テーマのまとめ（リーフレット）の作成に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は文科省の委託研究事業を受けたことで、それ中心に研究を進めていく一年となった。研究を進めていく上では全国の附属幼稚園や教育学部の先生にも協力を仰ぎ、文科省との連絡も頻繁にとりながら進めた。負担も大きく非常に大変な取り組みとなったが、これについての取組と実施は本園の実績としては大きく評価できる。 ・コロナ禍の影響でICT化が進み、今年度もオンラインでの研修となった。操作にも少しずつ慣れ、スムーズに取り組めるようになり、動画の配信方法や動画を使ってオンラインで研修する方法も工夫を重ねた。 ・今年度は研究紀要でなくリーフレットを作成した。シンプルなものを作成する分、研究を全体的に見直す意識を高く持てた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動画を基に話し合うことで、子どもの姿、教師の願い、環境など、じっくりと考えることができた。日常の保育での悩みを話し合う等、写真や動画等をより今の保育に活かせるような機会を持つようにする。 ・園庭を含め、園全体の環境整備を積極的に行っていく。 ・オンラインの研究会が重なり、来園者が少なくなっている現状では、園庭やテラス、保育室などの環境構成の工夫の点が甘くなる。来園者に保育や環境を見てもらうという緊張感がなくなってしまっている、環境を自分なりに厳しく見直すということがなく過ごしてしまったのではないかと。来年度以降気を付けていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・非常に多忙な業務に加え、委託研究事業に取り組む、やり遂げたことは非常に評価できる。多くの人に発信し、アピールするとともに、今年度の取組が多くの幼児教育関係者に活かされることを期待する。 ・オンラインを活用した研修や新しい形の研究会等の発信により、常に学び続け、研修を重ねる園の在り方が評価できる。今後も三重県の幼児教育をけん引していくような存在であってほしい。 ・市町では幼稚園が統合されたり廃園になったりして減少化が進んでいる。そのような中であって附属幼稚園の立ち位置やモデルとしてどのようなことを提案していくかが問われるだろう。

	大学	大学の附属機関としての役割を積極的に果たす。 学部教員との連携の在り方と方法を検討する。 学部教員との連携を充実発展させ、さらに本園教員の教育力を高める。	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍で、外部との関わりが難しいところがあり、大学との連携活動でも計画通りに進まない状況であったがその中にも工夫してできることに取り組むことができた。直接幼稚園に来てもらったり、子どもと交流したりはできないものの、担任と相談しながらおたよりで発行した活動もあり、充実していた。 ・昨年からの引き続きの活動に加えて英語の活動等を新たな活動として取り入れることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな活動としてなかなか開拓できない現状であるが、教員のアイデアと工夫で新規のものに取り組んでいくようにしたい。 ・幼稚園の園だよりに大学の先生からのコラムを載せる取り組みをする。 ・大学の先生に幼稚園に足を運んでもらう機会を増やし、幼稚園のこと、遊びの中での幼児の姿などについて知ってもらいたい。 ・職員向けのスキルアップ研修の機会を作っていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の先生と連携を取りやすく、迅速に連携活動が行えることが附属の強みでありメリットである。附属学校園にいることのメリットを十分にアピールしていくと良いのではないかと。 ・今後も積極的に進めていってほしい。
	附属学校	「一貫教育推進ビジョン」に基づき、各委員会で具体的な研究を推進する。各委員会での活動を集約し、カリキュラムの作成に向けて検討を重ねる。 ・学校間での連携活動に積極的に取り組み、事前、事後検討、子どもの学ぶ姿等の共有や見直しを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は一貫教育の主幹校となり、各校園のコーディネーターの先生方と共にコーディネーター会議で一貫教育の進め方を協議した上で合同集会2回、小委員会4回を開催することができた。コーディネーター会議では各校園の先生と意見をすり合わせながら小委員会の内容、進め方等協議することができた。 ・教育学部においても副学部長を含む学部の先生方、各校副校長とWGを立ち上げ、一貫教育のディプロマポリシーについて協議した。各校園の目指す子ども像をすり合わせ、附属学校園で育てたい子どもについて共有するとともにポンチ絵を作成し、視覚的にもわかりやすいものを作成することができた。 ・コロナ禍ということもあり対面での委員会開催は難しかったが、オンラインを使って開催することができた。実際の交流授業、出前授業、授業参観等の活動は計画していても行うことが難しいものもあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一貫教育について進捗状況はあまり芳しくない。各校園、各職員の一貫教育についての考え方に温度差がある。今していることを整理し、一貫教育という同じ方向で表現していくことで形に残していけるのではないだろうか。主幹校となった校園に任せておくのではなく、四附として進めていくことが大事である。管理職が一貫教育について共通理解し、教育学部の教員も参加しWGを続けていくことが期待される。 ・年3回という限られた時間の中で互いの状況を実際によく知っていくためには、開催時期や報告の在り方等、検討していくべきである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育の大切さが社会的にも認知されてきている。幼稚園で遊びの中で子どもたちが学んできたことを小学校教育につなげていくようにこれからも継続して取り組んでほしい。 ・幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校が一つの敷地内に集まっているのが三重の附属学校園の特長である。この利点を十分に活かして行ってほしい。
連携	保護者	保護者の子育ての悩みを受け止め、適切な子育て支援に努め、保護者との信頼関係を深める。 ・HPや園の便り、クラス便りでの情報発信 ・クラス懇談会や個人懇談の開催 ・降園時や連絡ノートを通して幼児の様子を発信したり保護者の相談に応じたりする。 ・保護者と共に幼児にとってよりよい園生活を目指し、子育て支援の意識をもって保護者に関わる。	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園生活において、子どもたちの遊びや生活についてがクラスだよりで各担任からの発信はかなり多かった。内容も充実していた。 ・昇降口に掲示板を提示し、それを基に保護者と子どもが出来事を話したり、子どもが活動を振り返ったりする姿が見られ、良かった。 ・今年度クラスだよりを掲示板に掲示することにした。保護者にとっては、他のクラスのクラスだよりに関心をもって子どもとみている姿もあり、ある程度の効果はあったのではないかなと思う。 ・登降園時に保護者に積極的に挨拶をし、話しかけやすい雰囲気づくりに努めた。園での子ども様子や言動を少し伝えることから会話が始めると実感できることも多かった。 ・コロナ禍で園庭開放がほとんどなく、降園時になるべく様子を伝えるようにはしたが、保護者の方とじっくり話す機会があまりもてなかった。そういう状況であっても、保護者と話ができるよう工夫が必要である。 ・クラスだよりは最低月2回以上は出すことができたことは評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページでの発信を積極的に行う。 ・登降園時を活用した保護者とのコミュニケーションを続ける。 ・保護者と幼稚園のこと、子どものこと、発達のこと等を気軽に話したり、相談したりできるような機会を作る。 ・育友会活動について、ボランティア活動についても積極的に取り組んでいく。情報発信をし、コミュニケーションを取りながら進めていく。 ・クラスだよりについて、年度当初にある程度の内容や回数について担任と共有する。 ・園だよりの中で園としての思いや援助の方向性について伝えていく。 ・大学の附属幼稚園ということを活用し、園だよりの中で教育学部の先生のコラムを毎月一回入れてもらうことで、保護者にとって幼児教育について広い視野からとられる機会となることを期待できる。 ・タブレット等を利用して、保育や子どもの様子を伝えられる工夫をしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者への発信は紙面に頼るだけでなく、ICT機器を使って効果的な方法を検討していくと良い。今の保護者は紙で配布されても読まないことが多いのではないかと。通信の配信を始めたことは評価できる。今後、もっとICT機器を有効活用して発信していくことで附属幼稚園のことを知り、理解してもらえ保護者が増えることが期待される。 ・保護者アンケートからは一定の評価がされていると受け止めることができる。コロナ対策を考えながら園運用について今後も模索して行ってほしい。
	地域	未就園児親子の会「コアラの会」を定期的開催する。 地域に向けて研究成果の発信、貢献に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍であってもできる限りの対策を講じながらコアラの会を開催することができ、未就園の保護者にとっては貴重な機会だったとの声も聞かせてもらうことができた。ただ、9月に緊急事態宣言、2月にまん延防止等重点措置と感染拡大の影響で中止にせざるを得ない状況になり、15回中4回が中止となってしまった。 ・学生にも感染対策に配慮してもらいながら、会の企画、運営を進めてもらうことができ、毎回の振り返りの会も保護者ボランティアを交えて有意義なものとなった。 ・コアラのおたより「おひさま」は「スタッフのつぐやき」等を交え、この年齢の幼児をもつ保護者にとって読み応えのあるしっかりとしたものとなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページに未就園児の会についての発信をすることで広く外部の人にも興味をもってもらえるようにする。 ・例年、この時期の幼児に経験してほしいと考えている絵の具遊びや新聞紙での遊び、水遊びなどが会の中止によって行うことができず残念であった。また感染防止の観点から粘土遊びも断念した。幼児期のこの時に経験してほしいことがコロナ対策によってできなくなっていることが多い。保育者としてもまた保護者の側からしても葛藤を抱えながら、できることを何とか工夫しながらしてきている状態である。今後もできることをなるべく工夫して、子どもたちに豊かな経験をさせてあげたいと思う。 ・保護者が学べるような機会（「お母さんのための勉強会」）もなかなか開催するところまでいかなかった。今後検討したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症対策を行いながらも未就園児の会を継続して行えたことは評価できる。子育ての大変さについて話を聞いたり、共感したりする場、一緒に子どもを見守ってくれる場がこのコアラの会であり、保護者にとってのよりどころとなる大切な場である。今後も大切にしていってほしい。 ・幼児教育に対する社会のニーズにどのように応えていくか。すべてのニーズに応えることは難しいと思う。附属幼稚園として大切にしていること、信念を持ちながら、今求められている幼児教育へどのような形で応えていくかを検討して行ってほしい。